

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：34301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23056

研究課題名（和文）仏教講釈文献の利用と説話の発展に関する写本学的研究 敦煌文献を中心に

研究課題名（英文）Philological study on the use of the Buddhism lecture manuscripts and development of Buddhist sutra literature focusing on Dunhuang manuscripts

研究代表者

高井 龍（Takai, Ryu）

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：80711308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、敦煌文献の中でも仏教講釈文献と儀礼文書中の文学文献の利用を明らかにした研究である。敦煌文献は、9、10世紀の写本を多く残すが、中国の古典文献は多くが版本によって伝承されてきたため、写本研究は十分に行われていない。4点の写本を残す「祇園因由記」は、『維摩経』の講釈と関わりも深い。各写本の内容には相互に一致しない面がある。この問題について、写本研究により、利用の場に応じて内容が書き換えられていることが明らかとなった。また、『維摩経』の講釈文では、3点の写本を通して、書写過程や利用の場から、写本そのものの利用状況と仏教儀礼における利用状況について、大英図書館の調査を通して明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国では、宋代以降徐々に版本が浸透していくが、唐代はなお写本による文献の伝承が主とされた時代である。しかし、中国の古写本は残存数が極めて少ない。敦煌文献は、そのような中において極めて特異な資料群である。今回の研究課題として取り上げた4点の「祇園因由記」と3点の「維摩詰所説経講釈文」は、いずれも当時の敦煌の仏教界において主要な仏教文献として利用された文献である。それらの写本としての特徴を解明することは、写本時代における中国の文献と知の伝承の理解にも資する成果であり、当時の仏教と文学の実態を新たな角度から明らかにした意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the practice of sutra lecture manuscripts and the development of literature in Buddhism rites through Dunhuang manuscripts. There are many original manuscripts of 9th and 10th century in Dunhuang manuscripts, however most of Chinese classical documents have been transmitted by books, which alienated modern researchers to study manuscripts itself.

There are four Qiyuan Yinyouji manuscripts. It was one of the famous Buddhism stories and the four manuscripts of it had a lot to do with Vimalakirti-nirdesa Sutra lectures. The contents of them are different each other. Through the study of those manuscripts, I found out that its content was rewritten resourcefully according to when they were used.

There are also sutra lecture manuscripts for Vimalakirti-nirdesa Sutra. By studying three of them, I found out how they were used for sutra lectures and the Buddhism rites from the writing process and each condition of those manuscripts.

研究分野：敦煌学

キーワード：維摩詰所説経講釈文 祇園因由記 敦煌文献 写本研究

1. 研究開始当初の背景

1900年に敦煌から発見された文献は、およそ6万点に及ぶ。それらは9、10世紀頃の写本を中心とする寺院文書であることから、当時の僧侶が儀礼や講釈の場で実際に使用した写本が多く残されている。この敦煌文献に対しては、その発見後、仏教分野からのみならず、多分野から数多くの研究が進められてきた。

それらの研究を受けて、今日なお多くの研究が必要とされる研究分野の一つに、写本研究がある。現代に伝わる中国の古典文献は、その大部分が版本によって伝承されてきたものである。そのため、版本研究は前近代より極めて高度な学問に発展したのに対し、写本研究は十分に進められてはこなかった。しかし、敦煌文献の大部分を占める写本は、当時の一次資料であり、版本が普及する以前の文献のあり方を窺うにあたって、恰好の資料である。この敦煌文献の性格を活かした研究の推進は、中国古写本研究のみならず、中国古典文献の理解に対して重要な意義を持つであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、写本が文献伝承の主とされた時代の中国において、いかに仏教講釈文献が利用されたのか、またその講釈の中で語られた仏教説話がいかなる内容の書き換えを経て、また発展変遷していったのかを、写本研究によって明らかにすることにある。その中でも、9、10世紀の講釈文献の写本には、実際の使用の痕跡を確認できるものが少なくない。実際に使用された写本を見ると、それぞれの写本の成り立ちは一様ではないことが分かる。例えば、本来由来の異なる複数の講釈文献を貼り継いだものや、未完成の状態でありながら実際に使用した痕跡を持つものが確認される。このような成り立ちの問題のみならず、そのような文献が実際の講釈の場でいかに使用されたかも、今なお十分に討議されていない課題である。また、講釈に使用される仏教説話には、なお研究が進められていないものもあり、且つ日本の古典資料と比較可能なものも残されている。このような点に着目し、本研究は、講釈文献の写本学的考察によって、当時の仏教講釈やそこに関わる仏教説話の発展変化を浮き上がらせることを目指す。

3. 研究の方法

本研究の達成のためには、写本の利用を明らかにする必要がある。それは、写本を実際に調査することを最も重要な方法とする。現在では、敦煌文献の多くが国際敦煌プロジェクトのホームページ(<http://idp.bl.uk/>)をはじめ、各国の文献所蔵機関のホームページ等に公開されており、極めて精細な彩色画像を閲覧できる。それらの画像とこれまで出版されてきた大型図録を使用する一方、実際に文献所蔵図書館へ足を運び、墨や紙の特徴のみならず、写本そのものの全体像を窺う調査を行う。

まず、10世紀頃に使われた『維摩経』の講釈文献である「維摩詰所説経講経文」(現存写本9点)のうち、大英図書館に所蔵されるS.4571+S.8167とS.3782の実見調査を行い、写本学の角度から、講釈の実態を解き明かすことを目指す。そして、祇園精舎の建立を主題とする故事を写した写本(P.2344V、P.3784)及びその関連写本(P.2191V、P.3815)を取り上げ、それらがどのように広く受容されていったのかを解明する。

2011年の拙稿(「敦煌本「祇園因由記」考」)で明らかにしたように、9世紀の敦煌に広い受容があった祇園精舎建立故事は、10世紀になると講唱体文献「降魔変文」として広まっただけでなく、莫高窟に多くの壁画が描かれたことが知られている。9、10世紀における当該故事の流布を、写本研究によって解き明かすことにより、写本を主として文献が伝承された時代の文学や仏教が、どのような変容を遂げ、また発展したのかを解き明かす。9世紀には密接な関わりにあった『維摩経』と祇園精舎建立故事との関連が、10世紀においてはどのように変化したのか、両者の関係の変遷を明らかにする。

4. 研究成果

2019年度は、敦煌文献中に4点の写本(P.2191V、P.2344V、P.3784、P.3815)を残す祇園精舎建立説話を取り上げて研究を進めた。

まず、4点の写本の筆や紙とともに、書写時における空白の残し方等にも着目することによって、当時の僧侶が講釈や講義の場において、いかにそれらの写本を利用していたのかを明らかにした。そして、写本ごとに異なる内容へと書き換えられた箇所があることに着目し、9世紀における当該故事の多様なあり方と受容を指摘した。また、当該故事と同系故事である敦煌文献中の「降魔変文」が、10世紀に広く流行したことを受けて、9世紀と10世紀の間にいかなる相違があるのかについて考察を進めた。その結果、9世紀に流布した祇園精舎建立説話が経典に準じた内容であるのに対し、「降魔変文」が強い虚構性を備えた故事へと発展していること、また「降魔変文」のそのような特徴が、他の10世紀の仏教講釈文献や仏教文学文献に通じる特徴であることを踏まえ、経典に近い内容の故事の受容が徐々に衰退していったと考えられることを指摘した。従来の研究では、経典に近い内容の故事は、それ程多く注目されず、文学的な発展を遂

げた変文が、文学研究者の注目を惹いてきた。しかし、仏教經典とは本来改変の許されない典籍であり、それを順守することの意義は、決して小さくない。なお、經典的性格を強く持つものと虚構性の強いものとの相違は、日本に残された仏教説話からも類似した状況が確認される。特に、虚構性を強く押し出す故事が一部独立した形で展開していたという日本の状況からは、当該故事が東アジアの広い地域に受容されながらも、その発展のあり方に一定の類似した側面があったことを推測させるものである。

2020年度は、「維摩詰所説經講經文(擬)」の写本調査を通して、講經文の写本の利用について、**S.4571+S.8167**、**S.3872**、**P.2292**を通して明らかにした。

S.4571+S.8167は、一部を失った状態であるものの、なお22メートルを超える長巻であり、その重さと書写方法からは、実際の講經の場で使うことは目的とせず、その中の内容を他の写本に抜粋して使用する底本であることを明らかにした。**S.3872**では、經文とそれを敷衍した韻文は同一写本に由来するものの、散文は別の写本から貼り合わされていることを明らかにした。そのために、この講經文の取り扱う經文が、『維摩經』の複数巻(仏国品第一と方便品第二)に跨るにも関わらず、そのことが明示されていないため、実際の講經の場で利用するには問題が生じることを明らかにした。**P.2292**では、その写本の執筆者が各地で仏教の布教に努めた人物であることや、実際の講經の場では、特に写本後半の内容が説かれたと考えられることを指摘した。以上の考察は、説話性に富む『維摩經』の講釈文献が、10世紀敦煌でいかに用いられたのかを明らかにしただけでなく、写本の残存が多くない中国古典文献の利用と伝播の理解に資する成果である。その一方で、2019年度の研究において明らかにした『維摩經』と「祇園因由記」との関係が、「維摩詰所説經講經文(擬)」には認められないという問題が浮かび上がった。この背景には、多くの講經文が敦煌以外の地域から将来されたものであることを併せ考える必要がある。しかし、その具体的な解明は、当時の文献の受容に潜む種々の要因をも明らかにせねばならず、今後の研究課題である。

中国の古典文献の多くが版本によって伝承されたために、なお多くの研究余地が残る写本研究の中で、講經における写本の実際の利用や伝播に関する具体的な資料を通じた考察を進め得たことは一つの重要な成果であったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高井龍	4. 巻 14
2. 論文標題 敦煌本「祇園因由記」考（続）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/DunhuangNianbao_14_69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高井龍	4. 巻 15
2. 論文標題 講經文の成立と利用 -- 「維摩詰所説經講經文(擬)」を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/DunhuangNianbao_15_17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------